

学生時代における失敗の意味

—ある不登校学生の事例—

山本 大介

(鳥根大学保健管理センター)

Meaning of the failure in the school days

—A case report of a school refusal—

Daisuke Yamamoto

鳥根大学生涯学習教育研究センター

平成15年11月

学生時代における失敗の意味

—ある不登校学生の事例—

山本 大介

(島根大学保健管理センター)

Meaning of the failure in the school days

—A case report of a school refusal—

Daisuke Yamamoto

Abstract

This paper discusses the meaning of the failure in the school days of a school refusal. I want to find out a positive meaning to the event that has negative meaning. However, it may be arrogant and cruel. The meaning of his failure has not been find out yet. It may be created in the future and may not be done. Even if it is created, it fades away, and also a new meaning may be created. I have to contain that we do not understand.

I. はじめに

失敗というのは、かっこうの悪いことであり、つらいことであり、失敗しないに越したことはない。しかし私たちは多かれ少なかれ何らかの失敗をしてしまう。それがけっこうな痛手となることもある。とりわけ学生時代は、学校でも家でも生活の枠組みが緩むぶん、様々な失敗が起りやすい時期だと思う。私自身、学生時代は本当に失敗ばかりで、もう一度あの頃に戻りたいかと問われれば、即座に「否」と答えるだろう。今の私はそうした失敗も過去の思い出として語ることができるが、もし仮に今、私が不幸の最中にあったならば、自分の学生時代はかなりの怨念をもって思い出され、悔やまれ、嘆かれるに違いない。

私は10年ほど前より、大学内に設置されている保健管理センターというところで働いている。保健管理センターというのは、簡単に言えば保健室のようなもので、学生や教職員の健康のサポートをするところである。私はそこで、大学生の様々な悩み事の相談に応じる仕事（学生相談）に携わっており、毎日、たくさんの学生に出会っている。学生の口から語られるのは、まさに「失敗」をめぐる物語である。ある者は悲しみをもって、ある者は後悔をもって、またある者は怒りや憎しみをもってその物語を語る。それはひとりひとりの学生に固有のものであり、私たち相談担当者は学生と共にその物語の意味を考えてゆく。

この小論では、あるひとりの不登校の学生の姿を辿りながら、学生時代における失敗の意味ということについて考えてみたいと思う。

II. ある不登校の学生

彼は3回生の6月、担当教官や母親と共に保健管理センターにやってきた。彼は1回生の夏休

み明けより不登校となった。「入学して急に大学に行く気がしなくなっただけです。普通に大学に通って卒業すればいいというのはわかっているけど、何故かできなくなっただけです」と本人にもよく理由がわからなかった。母親も「本人は『だるい』と言うだけで多くを語らないし、あまり追求しすぎると『もともと大学には行きたくなかった。本当は高校にも行きたくなかった。まわりが皆行くから、そうしただけ』と言うんです。大学をやめて就職したり専門学校へ行ってもどうかと言っても『だるい』とか『いや』とか言って、『ずっと今のままの状態が続いたらいい』と言います。いったい、どうしたらよいか、親としてもわからなくて…」と言い、これまでの自身の子育てを顧みて自責的になっていた。ただ、彼自身も彼の家族も「フリークライミング」という共通の趣味をもっていた。フリークライミングとは、人工的な手段を積極的に用いず、手と足だけの力で岩壁を登るスポーツである。彼は大学には行っていないものの、地元のサークルに所属して熱心にそれに打ち込んでいた。体つきもがっしりとして、日に焼けて健康そうで、一目でクライマーとわかる逞しい手をしていて、私にもこれからどうしてよいか見当もつかなかったが、彼の元気さと、子供のために遠いところから急いで駆けつけてくれた母親の姿、そしてフリークライミングという家族の絆を信頼して、「2年間も大学に行かないというような徹底したことをしているのだから、きっと彼は意思が強い人なんだと思います。そして、この不登校体験にはきっと何か大切な意味が含まれているのではないかと思います。ご本人は今、困難な岩壁を今登っている、つまり、心のフリークライミングをしているんだと思って、みんなで頑張ってください」と声をかけた。彼はしばらく休学して、自分の身の振り方をじっくり考えてみるようになった。

私は彼が何故に不登校になったのか少しでも分かってほしいと思い、彼の家族について問うてみた。私たちは誰しも持って生まれた資質と生れ落ちた家族という環境との関わり合いの中で生まれてゆくので、彼の不登校もそういう視点から理解できないだろうかと考えたのである。

彼は伝統ある大きな家の、曾祖父、祖母、両親という5人の大人の中に長男として生まれた。当然、家族の期待は大きく、彼は小さい頃より「お前はやればできる。立派な人間になる」という信念を託されて大きくなっていった。こういう話を聞けばすぐに、「周囲からの過剰な期待を背負わされ続けた子供がそれを押し返し、自分らしい生き方を模索しようと、もがいている姿としての不登校」というストーリーが思い浮かぶが、彼自身は「重たいと言えば重たいけど、そんなに気にはしていない」と言った。また彼は父親との間柄にも言及した。「父親は僕のことをよくわかっていると思っていました。でも、それが全然違ってたりするんです。高校の頃ぐらいから、『俺は違うんだけどなあ…』というのが増えてきました。父親は弁の立つ人で何か話をして全部言い包まれてしまうんです。でも最近はずっと僕のことを考えてくれるようになってきています」と彼は言った。父親自身、後に直接会って面談をした際、「幼い頃から、私が彼を溺愛する一方であまりにも厳しくし過ぎた面があって、その不均衡がこの不登校の原因になっているのではないかと思います。でも直接顔を合わせると、彼の不甲斐なさに苛立ちを抑えきれず、彼を叱ってしまい、そのたびに後悔しています」と言っていた。

さて、最初は私のところに定期的に顔を出していた彼であったが、まもなく足は遠のき、次に現れたのはその年の暮れ近くであった。彼は元気そうに、クライミングの話をして帰った。年が明け3月になろうかという頃、来年度は復学しようと思っているという心づもりを話しに来てく

れた。

4回生になって彼は復学した。が、5月半ばになり担当教官の方から、連休明けから彼が授業に出ておらず連絡もつかないという知らせを受けた。私たちは、本人と保護者と担当教官と皆で集まって話し合いを持つことになった。このとき、初めて父親と会ったが、彼とよく似たスポーツマンタイプの爽やかな雰囲気、我が子を思う真摯な姿勢を携えていた。担当教官が彼と家族の間を取り持ち、双方の労をねぎらい、不安や罪責感を和らげるような適切な働きかけを行った。話し合いの後、母親がしばらく彼の元に留まって共に暮らしながら生活の立て直しを図ることになり、また担当教官と私も彼と頻繁に会うようにして大学生生活を軌道に乗せる手助けをすることにした。

周囲の応援のもと、彼は頑張って何とか前期試験を完了した。夏休み、彼はアルバイトをしてお金を稼ぎ、クライミングのため渡米した。後期が始まる前には帰国したものの、今度は後期の履修届けを提出する段になって、彼は両親や私たちに貝のように口を閉ざしてしまった。私たちが気をもむ中、履修届けはぎりぎり提出したものの授業には出ず、担当教官や私のところにも顔を出さなくなった。両親に対しても、他の話題には応じてても大学のことに関してはいっさい何も言わなくなった。母親は「以前は逃げているような感じでしたが、最近は堂々としていて、ふてぶてしささえ感じます」と言った。そして彼が小さい頃のあるひとつのエピソードを語ってくれた。彼が小学校低学年の頃、家族で旅行に行った際、バス停で騒ぐ彼に父親が「どうして騒ぐんだ。騒ぐ子供には切符は買ってやらないぞ。ひとりで歩いてゆきなさい」と注意した。そしてしばらくしてから、いつの間にか、彼がいなくなっていることに皆が気づき、大騒ぎとなった。必死で探し回ったところ、彼は本当にひとりで歩いて次の目的地へ向かっていた。私はその話を聞いて、彼と父親の闘いはその頃からずっと続いていて未だ決着がついていないのかもしれないと思った。しかし、父親は、どう考えても闘っているというより逃げているとしか思えないと悲しげに言った。大学に出ず、ひとり黙々とアルバイトをしながら暮らす彼のことを思いながら、両親も私たちも本当にこれからいったいどうなるのだろうと先の見えない不安の中に置かれた。

実は、ちょうど時期を同じくして、私自身も我が子が不登校になるという経験の最中であつた。小学生になったばかりの娘が、5月の連休明けから学校に行き渋るようになってしまったのである。当初は「何故、学校へ行けないの？」と娘を問い詰めて泣かしてしまったり、私と妻それぞれが昔の子供との関わりを思い起こして我が身を責めたり、罪のなすりあいをして夫婦喧嘩になったりと家の中は大混乱だった。担任の先生の言葉に「愛情が…」とか「愛情をもって…」とかいう単語が混ざるたびに肩身の狭い思いがした。そういう状況の中で私も妻もだんだんと「人の心というものとはそう簡単にわかるものではないんだなあ」ということを身をもって学び、半年かかってやっと保健室登校ができるようになった娘を、少しばかりやわらかいまなざしで見守ることができるようになっていた。私はそういう自分の体験も正直にそのまま彼の両親に話し、「確かなことが何も言えず、確かなことが何も示せないでいる彼のことを信ずることができるのは、親御さんをおいて他にはないと思います」という言葉を伝えた。

翌年の2月、突然、彼があらわれた。そして大学を続けて頑張るのか、退学して知人のところでアルバイトをするかということで葛藤していると聞いた。彼は担当教官や私には相談はしなかったものの、両親とはいろいろと話し合いを行い、いったんは退学してアルバイトをす

るという方向に固まりかけたが、クライミングの仲間に相談したところ、「途中で逃げてはいけない！そんなことをしたら友人としての縁を切る！」と言われ、苦悩していたのだった。彼は「これまでの人生の中で、こんなに重大な選択に直面したのは初めてです。自分で自分のことを決めるのは初めてです」と言い、「自分自身のことを他人に相談したことも初めての体験です。今までは人にこんなこと話したら批判されるのではないかと恐れていました。だから、人に相談できたことはとても意味があると思います」と言った。「先生にもっと早く話しに来ようと思っていたんですが…」と苦笑した。私は彼の労をねぎらった。その2週間後、クライミングの最中に8メートルの高さの岩壁から転落し、右手にギブス、両足に包帯という痛々しい姿で私の前にあらわれた。「これから慎重に歩みなさい」というお告げかもしれないということでその出来事は一応治め、彼は悩んだ末に、退学はせず大学への復帰を挑むことになった。

4月になり新学期が始まった。しかし彼は授業には出たり出なかったりのようにだったし、担当教官のところにも私のところにも顔を出さなかった。私たちは彼の真意をつかみあぐねた。私は思い切って彼の下宿を訪ねてみた。寝ぼけ眼の彼に意思を確認したところ、再チャレンジの気持ちに変わりはないというので、私は彼のお尻を叩いて奮起を促した。しかしその後も彼の動きはなかった。担当教官や私が電話やメールで連絡を試みるが繋がらなかった。再度、訪問したが彼は下宿にはいなかった。置手紙をしたけれども反応はなかった。担当教官と私は、「もうやるだけのことはやったし、あとは本人と両親にまかせてみよう」ということになった。

7月になって両親から連絡が入り、本人と両親と担当教官と私の5人で話し合いが行われ、とにかくこれを節目にして、今後の身の振り方についてちゃんと話し合い考えてゆくということになったが、彼の態度はなかなか頑なであった。後期が始まる直前、両親は藁にもすがる思いで、彼の弟を兄のもとへよこした。弟は、自分の気持ちを両親に素直に伝えるべきだと兄を諭し、それを機に親子の対話に復活の兆しが見え始めた。彼は両親に「大学を放棄したら今後何もできない人間になってしまいそうなので、もう一度挑戦してみたい」と言い、両親も「また同じ結果になるやもしれないが、息子を信じて見守りたい」と言った。後期が始まり、一度、彼から「講義に出ることにしました」というメールをもらったが、再び音信が途絶えた。もはや、担当教官も私も事態を静観するしかなかった。

翌年の1月、彼からのメールが突然飛び込んできた。「ご無沙汰しております。色々考えましたが、リハビリの学校で資格を取ることにしました。実はもう合格しました。今は手続きで実家にいます。それが済んだらそちらに行くので、そのとき伺いたいです。今までありがとうございました。ではまた」。私は驚き、すぐに担当教官に連絡をとったところ、同様のメールがやはり届いているということだった。担当教官と私は喜んだ。

2月の末に彼はやって来た。元気そうで生き生きとした瞳をしていた。彼は山の仲間に作業療法士という仕事が合っているかもしれないと言われ、実際に自閉症の子供たちに会ってみて、やはり自分に合っていると思い、専門学校へ通うことを決意したと言った。一緒に来た母親も清々しい安堵の笑顔を浮かべていた。私は、彼を「岩壁を登るクライマー」に、両親と担当教官を「岩壁の下で命綱を握る仲間」に喩え、岩壁に登り切った彼と、彼を下から辛抱強く見守りながら命綱をしっかりと握り続けた両親と担当教官に敬意を表した。彼は5年間の大学生活に終止符を打ち、新たな生活へ向けて歩み始めた。

III. 失敗の意味

私は基本的には、小柳（2001）¹⁾の主張と同じく、不登校を不適応あるいは病的なものとして捉えるのではなく、「生き方の変更」の時間として考えたい。この小論で取り上げた彼の場合も、山籠りをするかのように日常から離れ、自分自身のこと、自分と家族との関わりあいを見つめなおし、これまで聞き届けられることのなかった様々な自分の声を拾い集め、そして再び山を降りて世間に戻ってくる、そういうプロセスとして捉えたい。具体的に言えば、彼の不登校という体験には、周囲からの過剰な期待を背負わされ続けた彼がそれを押し返し、もがきながら、自分の生き方を見出すという意味や、父親の愛情のこもった、しかし、やや窮屈な思い入れの世界の中の自分から脱皮するという意味、自分のことを自分で主体的に責任をもって決断するという意味、そういう意味が含まれていると考えたいのである。

ただ、これはあくまでも私の個人的な思い入れであって、彼の口から明確な言葉として語られたわけではない。また、彼との関わりをあらためて振り返ってみると、彼は殆ど口を閉ざしているという事実を見逃すわけにはいかない。要所要所では周囲に促され、何らかの言葉を発しているものの、語っていないことのほうが遥かに多いのである。そもそも個人の心の中も家の中も外からは見えないようになっていて、個人の心や家族のありようというものは長い歴史があって非常に複雑で込み入っており、当の個人、当の家族すら、わけのわからない部分のほうが大きい。断片的に語られた内容、垣間見えた姿だけで、簡単にそうと決めつけてしまうと大きな誤解を生じることになりかねない。

彼の生い立ちにしても、彼のような家族のありよう、親子のありようは何も特殊なことではなく、わりと普通に平均的に見られるものではないかとも思う。家族が子供に大きな期待をかけるのは当然のことであるし、親は我が子の姿を生まれたときから一母親はお腹の中にいる頃から一見て感じて知っているのだから、「子供のことは自分（親）が一番よく知っている」と思うのも自然なことであろう。そもそも子供というのは家族からの大きな期待や思い入れのもとで育てゆくものであり、それが自然な姿であろう。事実、彼と似たような境遇の中にいる若者は沢山あるだろうが、その若者がみんな不登校をしているわけではないだろう。環境が似通っていても、その個人が過敏で傷つきやすい素質をもっていれば、外傷的な影響を受ける可能性はあるが、彼の様子からはそういうことも考えにくい。このように考えてみると、単に家族関係や親子関係の文脈だけから彼の不登校の意味を考えるということが難しくなってくるようにも思えてくる。

そこで、全く対極的な視点から別のストーリーを考えてみたい。

彼はたいした理由もなく、何となく授業に出るのが嫌になり、そのままズルズルと不登校状態に陥ってしまった。自宅で家族と暮らしていればそこから抜け出すきっかけが偶然に生じる可能性も生じやすいだろうが、独居だとそういう機会も乏しく、気がついたら何年も経っていた。両親や担当教官や私が慌てて関わり始めたときにはもう既に手遅れで、同級生もいない、学生生活のリズムも失われ、これまでに勉強したことも、勉強の仕方すらも忘れていて、そういう状況からの学生生活への復帰は、岩壁を登るよりも遥かに難しく、最終的には退学せざるを得なかった。しかし、彼が強靱な精神力や体力を持っていたこと、両親や担当教官が彼のことを辛抱強く応援し続けたこと、フリークライミングという絆で家族や仲間と結ばれていたこと、それによって彼は何とか逆境を持ちこたえ、幸運にも作業療法士になりたいという新たな自分の生き方を見出し

て専門学校へと歩みを進めていった。

このストーリーにおいては、彼の不登校そのものには何の意味も与えられておらず、不登校はただの失敗でしかない。こういう見方は、いわゆる普通の見方であるが、もしかしたら彼の場合もこういう普通の見方の方が実情に即して、しっくりくるのかもしれないという気もするのである。

2002年12月26日の朝日新聞に山本華子さんという小学5年生の生徒の作文が取り上げられていた。それは自身の不登校の体験を綴ったものであった。「私は、小学2年生の時、ちよっぴり心がさびしくなっていました。一人で学校に行けなくなってしまったのです。なぜかって聞かれても、なぜだったのか、なんだかさびしい気持ちだけが残っているだけで、今でも、自分のことなのに原因がわかりません」「心の事は、まったく人には、分からず、理解してもらえないものです」「その時の気持ちはたぶん一生わすれる事はできないでしょう」²⁾

彼女は降って沸いたように訪れた人生の危機を家族や先生の支えによって乗り切り、後になって当時の苦労を振り返って作文に書いたのである。私はこの作文を読んだとき、ショックを受けた。私はこれまで不登校の学生に対して、彼らを慰め、励まし、勇気づけるべく、その不登校に何らかの意味を見出し伝えてきた。しかし、もしかしたらそういう私の言葉は、本人自身ですらよくわからない体験に、他人が勝手に意味づけをする乱暴な行為として体験されはしなかったか。相手を元氣付けようとするこちらの意図とは裏腹に、かえって相手を孤独においやりはしなかったか。

星野富弘さん³⁾という人のことにも言及したい。星野さんは大学を卒業し、体育教師として中学校に赴任して2ヶ月も経たないうちに、放課後、部活のマット運動の指導中に事故で頸髄を損傷し、以来30年余りずっと首から下が動かない生活を送っている。口に筆を加えて描き出される星野さんの詩画は多くの人の心を癒し続けている。私は星野さんのことを考えるたび思う。もしあのとき星野さんが事故に遭わず、そのまま順調に体育教師を続けていたら、心あたたまる優しい詩画は生み出されなかったかもしれない、そうなれば星野さんの詩画に出会って命救われた大勢の人は、もう既にこの世にはいないだろう。そう思うと一瞬、星野さんの失敗には大切な意味があったと言いたくなる。しかし、私たち他人がそう考えることは星野さんに対する冒涇ではないか。自らの失敗に意味を見出し語るができる資格があるのは星野さん自身だけではないか。

私たちは物事に意味を見出すことを切に望む。とくに常識的にはマイナスの意味しか付与されないような人生における失敗にこそ意味を見出したいと願う。しかし、失敗はあくまでも失敗であって、そこに意味はない、そういう厳しい現実から目を逸らすことはできないのではないか。もし、その失敗に出会わなければ、もっと幸せになれたかもしれない、こんなに苦労なくて済んだかもしれない、死ななくて済んだかもしれない、そういう見方を忘れてはいけないのではないか。人生における失敗体験に安易に意味を思い入れることは傲慢で残酷なことではないのか。

私は彼と別れるにあたり、この5年間を何とか意味ある経験として自らの人生に位置づけてほしいと思い、彼なりに振り返ってまとめてみてもらえないだろうかとお願ひしたのだが、その後、彼からは返事はなかった。もしかしたらそれは、他人である私が彼の体験に安易にしかも早急何らかの意味を思い入れようとするこへの彼なりの返事だったのかもしれない。

彼の不登校という失敗体験にどのような意味があったのか、それは未だわからない。彼がこれ

から生きてゆくなかで、何らかの意味が創り出されるかもしれないし、創り出されないかもしれない。そしてあるときある時点である意味が創り出されたとしても、後になれば、その意味が消えたり、また別の新しい意味が創り出されてくるのかもしれない。私たちはわからないことを持ちこたえながら、それを待たなければならないのだと思う。

参考文献

- 1) 小柳晴生「不登校学生の心模様『生き方の変更』に挑戦する学生たち」『学生のための心理相談 大学カウンセラーからのメッセージ』培風館、2001年、pp. 182-195。
- 2) 山本華子『心の健康』朝日新聞島根版、2002年12月26日。
- 3) 星野富弘『愛、深き淵より』立風書房、1981年。